私の葛西善蔵ノオト

（葛西善蔵はそんなに暗くて陰鬱だろうか？）

《1》苦手なものは戦前の日本文学

大きな声ではいえないが、私は最近まで日本文学が苦手だった。高校夏休みの課題として提出した読書感想文、そのために読んだのが田山花袋『蒲団』だった。読後、日本文学が苦手になった。今ならまだ口語言文一致体の早期成立を目指した近代国民国家成立の機運との関係性とかが係わることだと察しもつくが、とにかく日本文学は暗くて湿っぽくて描かれる世界が小さくてという固定観念がいつの間にか私の内部に根付いてしまった。その中でも最悪なのが葛西善蔵。彼の小説を１冊も読んでいないのに、風評だけで陰々滅々とした暗い破滅型の作家と思いこんでしまったのだ。私の同期の高校生達もみんなそんなふうで、葛西善蔵か暗いよなぁ、といっていた。

《2》葛西善蔵の詩情

だが今現在、私はそれはちょっと違っていたな、と思うようになった。実際に葛西善蔵の作品を読んでみて、私は何度もくすりと無音で笑ったから。どこかユーモアがあって優しい、魂の在り処を気にかけている、それが葛西善蔵だった。

私が最初に読んだのは名篇といわれる『子をつれて』１９１８年。

葛西善蔵の評伝を書いた鎌田慧も、その解説を書いた詩人の荒川洋治も、この作品から葛西善蔵作品のもつ詩人性や芸術性を語っている。その部分を紹介する。葛西文学の本質だと思う。

「行き場のないどん詰まりにいて、なおその悲惨を描く透明感は、映画のワンシーンのようであり、葛西の独壇場である」。葛西善蔵の小説はどれもとても短いものだが、他では得られない詩情とユーモアが滴るので、多くの作家の作品が消えたいまも忘れられてはいない。　＊「　」内は鎌田氏、地の文は荒川氏

なお、もうひとりつけ加えれば、講談社文芸文庫「葛西善蔵」の解説を書いた、水上勉がいる。彼もひたすらに葛西が詩人であることを説く。

《3》葛西ファンが教えてくれたこと

ところで葛西の同時代の作家たちには意外なほど葛西ファンがいた。リアルな生活面でも、小説にもでてくる下宿屋さんや酒屋さんなどは借金を返してもらっていないのに嫌な顔ひとつせず年の暮れには薦被（こもかぶ）りを届けてしまう有様だったらしい。また、戦後の文学者や作家にも葛西ファンがちらほら見うけられる。

《4》最後に

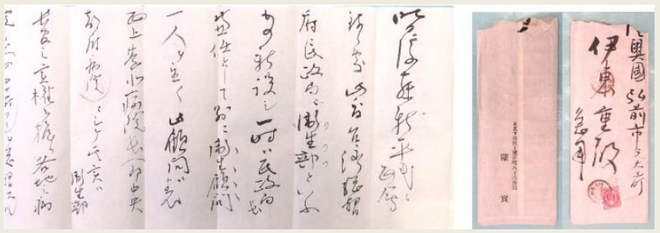
古井由吉、大江健三郎、多田道太郎といった人たちも葛西善蔵の特に最晩年の仕事ドストエフスキー『悪霊論』に関心を持っていた。紙幅がつきたので気になる方は講談社文芸文庫『転々私小説論』多田道太郎著ｐ５９参照のこと。

文：船越素子（詩人）…令和６年６月に弘前ペンクラブ会長に就任。『北奥氣圏』主宰。詩集に『修繕屋ノオト』などがある。

初公開資料

陸羯南　日清戦争の終結翌年の書簡

陸羯南が伊東重に宛てた書簡で、『陸羯南全集』未収録。日清戦争後、台湾開発の一翼を担う後藤新平は、台湾の総督府民政局に新設予定の衛生部衛生顧問（表面上は台北病院長、その実は衛生部長官の実権を握り各地の病院長を総督）に誰をおくべきかの相談を羯南にする。それに対し、羯南が伊東重を推挙、上京を促すことが書かれている。羯南が竹馬の友・伊東重のことを信頼し、また、後藤からも厚い信頼を受けていたことがうかがえる一通である。



陸羯南書簡　伊東重宛　明治 29 年 4 月 7 日付　（個人蔵）

お知らせ

新春 北の文脈文学講座

演題：文人墨客が愛した青森の温泉の今

講師：沓掛麻里子（くつかけまりこ）氏（青森の湯っこ協会代表）

日時：令和 7 年 1 月 18 日（土）

午後 2 時～午後 3 時

場所：当館 2 階ラウンジ

定員：20 名（事前申込制、先着順。

令和 6 年 12 月 18 日より受付開始）

講師：沓掛麻里子氏

「ぬい撮りコーナー」新設

（令和 7 年 3 月 21 日まで）

企画展のポスターにもなっているランプの宿 青荷温泉 健六の湯を背景に、ぬいぐるみや撮影グッズなどを使い、温泉に入っているような写真が撮れるコーナーを設置。

北の文脈ニュース　第 91 号

Kitano bunmyaku news

第 48 回企画展 「文学紀行－青森県の名湯」記念講演会　令和 6 年 8 月 17 日（土）　弘前市立観光館多目的ホール

「県民が愛した温泉場～歴史的観点からひもとく～」 講師：中園 裕 氏

（青森県地域生活文化課 県史担当 総括主幹）

－講演要旨（中園氏記）－

講師：中園 裕 氏

文学や作家と縁が深い温泉場。県民はどのように関わってきたのでしょうか。今回は資料や写真を駆使し、歴史的観点からひもときたいと思います。

中南地域は浅瀬石川と平川に沿って街並みが形成され、弘前市を中心に圏域を構成しています。二つの河川沿いに存在する多数の温泉は、中南地域を特徴づける重要な要素です。

作家の石坂洋次郎がこよなく愛した嶽温泉。岩木山麓に沸く古くからの温泉場です。かつては中央に共同浴場があり、その周りに内湯を持たない客舎が取り巻く典型的な湯治場でした。街場から遠い静かな場所だけに、温泉場で暮らす人たちは丑湯やお山参詣などの行事を楽しみにしていました。

碇ヶ関温泉といえば、昭和３０年代に一世を風靡した河畔の温泉プールでしょう。遠方からたくさんの親子連れが来て、プールはいつもイモ洗い状態。このため地元の子どもは平川で泳いだとのこと。

昭和４１年（１９６６）の水害でプールが流失した後、公民館を兼ねた温泉会館ができました。食堂を備え、大広間で結婚式を挙げた村民もいました。温泉会館はプールと同様、村民集いの場だったのです。

黒石十湯。かつて存在した１０か所の温泉の総称です。湯治場の雰囲気を残す温湯温泉、温泉開発で発展した落合温泉、浅瀬石川ダムと共存する板留温泉。三つの温泉場は、今も健在です。

これに対し沖浦温泉と二庄内温泉はダム湖（虹の湖）に沈み、要目温泉は集落移転で廃湯。古蔵温泉は早くに衰退して姿を消しました。けれども虹の湖の渇水期には、ダムに沈んだ道路や橋が顔を出します。ダム底は開発前の姿を映し出す鏡です。２月から３月と８月から９月が渇水期。ぜひ湖底を見に行ってください。

このほかに歌人の丹羽洋岳が開いた青荷温泉、作家の吉川英治が滞在した温川温泉、地元民が愛した切明温泉など、黒石十湯は個性あふれる温泉の宝庫でした。

昭和４０年代以降、盛んに実施された黒鉱の試掘。その際に噴き出た温泉を整備した温泉場が、平川市の平賀地区にあります。公民館を併設した大坊温泉や、レジャーランド的な発展を見せた南田温泉など、全部で１０施設を超えます。平賀地区の新興温泉群は、青森県を温泉王国に仕立て上げた陰の功労者といえるでしょう。

俳人増田手古奈が愛した大鰐温泉。かつて茶臼山の日精寺の背後に相生松と呼ばれる大きな松がありました。老木ゆえに大正１１年（１９２２）に伐採されましたが、日精寺は松の木を衝立にして、今も大切に保存しています。

相生松の別名は若松。このため松の近くにあった共同浴場は若松湯（現若松会館）と称し、橋端の湯とも呼ばれていました、近くに、はしばた食堂もありましたね。

若松湯に隣接する大鰐大橋を相生橋と名付けたのは、増田の師匠だった箕輪田銀一郎です。彼は相生会と称する青年団を組織し、教え子たちは茶臼山にツツジを植樹するなど、大鰐町のために尽くしました。

大鰐温泉も他の温泉場と同様、旅館の他に民宿や客舎が並ぶ湯治場でした。しかし客舎に内湯が併設され、共同浴場が各地に点在し、それらの近くには飲食店やスナックなどが並ぶ異色の湯治場でした。大鰐温泉がスキー場を隣接する温泉場だったからでしょう。

湯治場から一大レジャーランドになった相乗温泉など、温泉場は時代を反映するように変遷してきました。しかし、常に社交場として人が集い、楽しみ合う時間と空間を提供してきたことは変わりません。県民の大切な財産です。

少子高齢化が進む昨今、温泉場の維持経営は個人の力では限界が来ています。県民が支える必要があるでしょう。まずは日々利用し、宿泊することが大切。自らの余生を楽しむ手段として温泉を利用しましょう。それは人助けにもつながりますから。

スポット企画展

生誕 110 年 久藤達郎展　令和 6 年 7 月 10 日～9 月 23 日

久藤達郎（大正 3 年～平成 9 年・青森市）は、戦中戦後にかけて中央演劇界で劇作家として活躍した。本展は、久藤達郎の戯曲関係の資料を中心に約 30 点を展示。小説・随筆・詩なども含め、その文学的業績を紹介するものである。

久藤は 6 歳の年、母の郷里の鰺ヶ沢町に転居。幼少の頃に見た海は鮮烈な印象として久藤の中に残り、後の作品に強い影響を与えている。詩人・工藤正一の薫陶を受け、青森県師範学校では校友会誌に詩・短歌・小説を発表し文学に傾倒する。西津軽郡の各校で教壇に立つが、小説修行のため上京。小津安二郎のシナリオ塾に通い、18 年「たらちね海」で全国的な演劇脚本賞である国民演劇脚本情報局賞を受賞した。同作は長谷川伸、久保田万太郎の推輓により演出・里見弴、出演・宇野重吉、千秋実らで上演され、戦後は映画化もされた。同年に発表した「東風」（戦後「東風の歌」と改題）は、築港の実現に生涯を捧げた人間の苦悩を描いた物語。後に劇団創弦座（24 年創立 青森市）、劇団雪国（25 年創立 弘前市）、中央の劇場でも多く演じられ、久藤の代表作となった。

劇作家として活躍する一方で、弘前中央高校の演劇部創設、青森県高校演劇連盟の結成など学校演劇に力を入れる。劇団創弦座、劇団雪国にも作品を提供し、地方演劇の活性化にも寄与した。青森の民話を素材とした「シガマの嫁コ」（30 年）は、青年・学校演劇で上演許可の求めが千件以上にのぼり、ラジオ・テレビ・舞踊劇・人形劇・大学の英語劇でも上演された。

平成 9 年、久藤は 83 歳でこの世を去るが、その作品には、真摯に生きる人間の姿に焦点を当てたヒューマニズムが通底している。青森の風土に根ざしたものや終わり方に希望を感じさせるものも多く、描写に優れた名作を残した。

■主な展示資料
○青森県師範学校校友会『校友会誌』（青森県立図書館蔵）、原稿「宇野重吉のこと」、
○「東風の歌」舞台風景写真（薔薇座）、『学生演劇戯曲集』第三集（青森県立図書館蔵）、
○『シガマの嫁コ』未来劇場 No.51（青森県立図書館蔵）、『地方演劇』第 5 号（青森県近代文学館蔵）、
○劇団雪国創立 40 周年記念公演パンフレット「林檎事始」

スポット企画展

追悼・山田尚展　令和 6 年 9 月 25 日～12 月 9 日

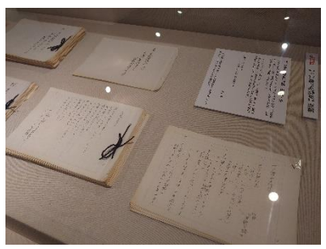
本展は、令和 6 年 1 月に逝去した詩人・山田尚を追悼し、その詩業を中心に文学的業績を概観するものである。山田尚は、昭和 10 年大鰐町に生まれ、県立弘前高等学校時代で詩を志した。「荒地」派の詩人たちの影響のもと、「四季」派的抒情を否定する戦後詩の土壌を詩業の出発点とした。昭和 40 年、第一詩集『北辺の樹』を刊行し、泉谷明と詩誌『亜土』を創刊。以後、青森県詩壇をリードする詩人の一人となった。また、先達詩人らの研究・顕彰にも取り組み、『まるめろ論 高木恭造の青春』（昭和 54 年）刊行、『高木恭造詩文集』全 3 巻（昭和 58 年、平成 2 年）編纂、そして、高木恭造、一戸謙三、今官一の文学碑建立などにも尽力した。

〈『亜土』創刊号〉の巻頭「《亜土》宣言」は「ぼくたちは宣言する。たえて宣言することのなかった世代から、ぼくたちを恢復するために」と始まり、「そしてなによりも、詩のなかに蘇生する個であらねばならない」と結ぶ。「《亜土》宣言」全 436 文字に込められた創刊の決意は、〈『亜土』第三次〉となった現在も受け継がれている。

展示では、各詩集のあとがきの抜粋と共に、詩を味わいながら詩作の変遷を辿ることができる 9 篇を紹介。〈『亜土』 第 3 次 第 120 号 別冊～山田尚の世界 追悼作品集～〉より厳選した。

山田尚が執筆した『一戸謙三全詩集』の原稿が今年 8 月、津軽書房より当館に寄贈された。昭和 62 年に津軽書房から出版を予定していたが、事情により実現に至らなかったものと思われる。未刊行『一戸謙三全詩集』の全貌を知ることができる貴重な資料である。

■主な展示資料
○『亜土』創刊号（複写）
○山田尚詩集『北辺の樹』、『リュリュの岸辺』、『冬の輪』、『北のまほろば』
○評論・研究『まるめろ論 高木恭造の青春』、『高木恭造詩文集』全 3 巻、他
○『一戸謙三全詩集』原稿
○刻書 山田尚・詩 工藤渓舟・刻「今日も雨おさげの彼女は摘みたての芹の匂いがした」



文学散歩　「大鰐温泉　せせらぎ編」

講師：櫛引洋一（企画研究専門員）　令和 6 年 5 月 11 日（土）

田山花袋、大町桂月、石坂洋次郎、太宰治など多くの文人が訪れた「いで湯の街・大鰐」を、平川のせせらぎを聞きながら歩き、町内に架かる七つの橋のうち、六つの橋を巡りながら各橋周辺にまつわる文人の話、小説・詩の一部を紹介した。

主な見学先は、増田医院跡地（俳人・増田手古奈が院長）、大町桂月歌碑、ヤマニ仙遊館。

増田医院跡地付近では、展示中の下澤木鉢郎の版画「大鰐温泉袴腰」と見比べ、今も変わらぬ景色を堪能した。また、加賀助旅館跡地にある大町桂月歌碑では、桂月が「川の音」と「夜明けの月」を情緒たっぷりに詠んだ短歌「雨かとてさむれば川の音にして尾上にすめる有明の月」を解説。そして、明治創業のヤマニ仙遊館では、文化財にも指定されている本館をご主人のご厚意で見学、伊藤博文や後藤新平の書額について解説していただいた。なお、葛西善蔵が宿泊した際の宿帳は、当館の企画展にて展示中である。

参加者からは、「歴史を学び、川のせせらぎの音と心地よい風が、大鰐の情景とマッチしてとてもよかった」「発見がいっぱいあり充実した 1 日となった」「仙遊館の中を見学できて、とてもよかった」等の声がきかれた。

多くのご参加をいただき、ありがとうございました。

相生橋

ヤマニ仙遊館

開館記念 無料開館　期間：令和 6 年 6 月 29 日（土）～7 月 1 日（月）

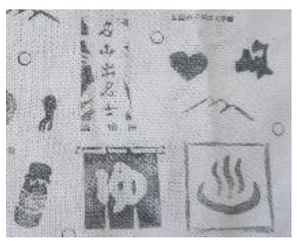
弘前市立郷土文学館の開館日（平成 2 年 7 月 1 日）を記念して、各種イベントを開催。初日に行われた鎌田祥史氏（温泉ソムリエ）の講演では「温泉のススメ－知って楽しむ青森の温泉－」と題し、温泉の泉質、効能、正しい温泉の入り方などを分かりやすく解説し、県内の温泉の歴史・文化を伝えた。

また、毎年恒例の「クイズラリー」、「歴代企画展スタンプ展」に加え、今年度の企画展に関連した展示では「太宰治ゆかりの温泉地」、「あなたの推し温泉〈名湯・秘湯〉を教えて！」、そしてワークショップでは「消しゴムはんこで作る手ぬぐい」を行った。

↑ 「クイズラリー」など各種イベントを楽しむようす

↑ 講師の鎌田祥史氏

↑ ワークショップ「消しゴムはんこで作る手ぬぐい」のようす



↑ ワークショップで使った「消しゴムはんこ」の絵柄

6 月 29 日～9 月 20 日までの集計（全 115 票）↓ ↓

「あなたの推し温泉〈名湯・秘湯〉を教えて！」
結果発表！
第 1 位　黄金崎不老ふ死温泉（深浦町）
三本柳温泉（弘前市）
第 2 位　三内温泉（青森市）
下風呂温泉（風間浦村）
大坊温泉（平川市）
からんころん温泉（平川市）
せせらぎ温泉（弘前市）
花の湯（弘前市）
青森県外編
第 1 位　秋保温泉（宮城県）
登別温泉（北海道）
多くの「推し温泉」をお教えいただき、ありがとうございました。